

イエスのことば 第 47 回

塩は良いものです。しかし、塩に塩気がなくなったら、あなたがたは何によってそれに味をつけるでしょうか。あなたがたは自分自身のうちに塩気を保ち、互いに平和に過ごしましょう。(マルコ 9 : 50)

□イエスの公生涯の起承転結

起：受洗から、メシア宣言（紀元 27 年の春、過越の祭り）を経て、宣教開始まで

承：メシアとしての権威を現わす。しかし結果的に、指導者層の拒否を受ける

転：弟子訓練

結：エルサレム入城から十字架（紀元 30 年の春、過越の祭り）、復活、昇天

□文脈の確認

1. 転の部、弟子訓練。十字架まで、1 年余。
2. 紀元 29 年の春、過越の祭りの頃から、同年の秋、仮庵の祭りまでの、約 6 か月間において、イエスは、異邦人の地域へ 4 回、旅行した。異邦人地域への 4 回の旅行は、**退避（リトリート）と休息の時**であったと同時に、**弟子たちの訓練**を目的とした。
3. リトリートの第 4 回目の行先は、ピリポ・カイサリア。ここで特筆すべきは、ペテロの信仰告白、そして高い山（おそらくヘルモン山）での変貌の出来事であった。ペテロの信仰告白のあとでは、イエスは初めて「死と復活の予告」を弟子たちに語った。
4. リトリートを終えて一行は、伝道拠点であったガリラヤのカペナウムへ帰った。その帰路では再び「死と復活の予告」、弟子たちはその予告を聞いて恐れたが、王国再興のとき自分たちの地位序列はどうなるのか、それが弟子たちの最大の関心事であった。
5. カペナウムに帰還したあとの出来事とそれに続いた弟子たちへの実際的な教え
 - (1) カペナウムに帰ってきたイエスたちのところに、神殿税を集める人がやって来た。神殿税はモーセの律法にはないが、神殿税を納めていないことを後ろめたく思ったペテロに対し、イエスは自分と弟子たちには神殿税を納める義務はないと教えた。しかし、イエスは、筋道を通すよりも、人を無用につまずかせないことが優先すると教えた。そしてペテロに命じて釣りをさせ、最初に釣り上げた魚がその口にくわえていた銀貨をもって、自分とペテロの二人分の神殿税を納めさせた。
 - (2) イエスが自分とペテロの二人分の神殿税を納めたことがきっかけとなって、弟子たちの間で、「では、弟子の中でペテロが一番偉いのか」と議論が再燃し、イエスのところに尋ねに来た。イエスは、近くにいた子どもを呼び寄せて、彼らの真ん中に立たせ、**誰が一番偉いかなどと議論せずに、子どものように自分を低くしなさい**、と教えた。
6. 今回は、弟子たちへの実際的な教えの続きである。

カペナウム帰還 実際的な教え

マタイ 17 : 22~18 : 35、マルコ 9 : 30~50、ルカ 9 : 43~50

□アウトライン

- | | | |
|-------------------------------------|---|-----|
| A) 死と復活の予告 (第 2 回目) | } | 4 月 |
| B) 弟子たちの関心事：誰が一番偉いか | | |
| C) 神殿税の納入：人を無用につまづかせるな | | |
| D) 誰が一番偉いかなどと議論せずに、子どものように自分を低くしなさい | | |
| E) 子どもをつまづかせるな ----- | | 5 月 |
| F) 教会の信者たちが「互いに平和に過ごす」ための教え ----- | | 6 月 |

E) 子どもをつまづかせるな

この話の前では、イエスは、近くにいた子どもを呼び寄せて、十二弟子の真ん中に立たせ、誰が一番偉いかなどと議論せずに、子どものように自分を低くしなさい、と教えた。

それに続いて、イエスは弟子たちに、**子どもの信者をつまづかせるな**、と戒める。大人の弟子たちが互いに議論していたことは、まわりにいた子どもたちをつまづかせるものであったからである。

この教えをするにあたり、イエスは 3 つのステップを踏んだ。

第一、弟子たちの誤った認識を正すところから入る。イエスを信じる子どもたちを、自分たちと同じ弟子として認めなさい、というのである。十二人の弟子たちにとっては、弟子の中で誰が一番偉いかと議論したとき、まわりにいた子どもたちのことは、そもそも眼中にもなかったからである。

第二、ここで使徒ヨハネが、自分たち十二人は使徒としての権威が与えられているのだから、子どもの信者に対してはもちろんのこと、他の大人の弟子たちに対しても上位ですよ、と確認するための話をしたことを受けて、そういうプライドは捨てなさい、と教えた。

第三、いよいよ本論、子どもの信者をつまづかせるな、という命令。この命令は、信者だけでなく、信者でない者に対しても適用される。実際、十二弟子の中の一人は信仰をもっていなかった。

1. イエスは、そばに立たせていた子どもを自分の腕に抱いて、次のように言われた。

マルコ 9 : 36~37 それから、イエスは一人の子どもの手を取って、彼らの真ん中に立たせ、**腕に抱いて**彼らに言われた。「だれでも、このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしではなく、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。」

マタイ 18:5 また、だれでもこのような子どもの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。

ルカ 9:48 彼らに言われた。「だれでもこのような子どもを、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。また、だれでもわたしを受け入れる人は、わたしを遣わされた方を受け入れるのです。・・・

2. ここで、十二弟子（使徒）のヨハネが、話に割り込んでくる。ヨハネは、イエスの最初の弟子たち5人の中の一人である。十二弟子の中でも人一倍、序列意識が高かったであろう。その自分が、他の大人の信者たちばかりか、子どもの信者たちとも同列にされては、ヨハネとしては納得がいかない。

この時点では、悪霊を追い出す権威は、多くの弟子たちの中でも、ヨハネたち十二人の使徒たちだけに与えられていた。しかし、弟子集団の中には子どもではないが子どもっぽい信者もいて、使徒のまねをして悪霊の追い出しをしている者がいた。

それをやめさせようとしたことを、ヨハネはここでイエスに報告する。この報告には、ヨハネの思いが見え隠れする。弟子集団の中でもヨハネたち十二人の弟子には特に使徒としての権威が与えられていて、他の弟子たちからは一段高いところに置かれているのですね、とイエスに確認を求める思いである。

イエスの答えは、「やめさせてはならない。まねさせておきなさい」である。また、どんな小さな働きも軽視してはならない、とも教える。これは、使徒たちに自分のプライドを捨てよ、という教えである。

ルカ 9:49~50 さて、ヨハネが言った。「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかったからです。」しかし、イエスは彼に言われた。「やめさせてはいけません。あなたがたに反対しない人は、あなたがたの味方です。」

マルコ 9:38~40 ヨハネがイエスに言った。「先生。あなたの名によって悪霊を追い出している人を見たので、やめさせようと思いました。その人が私たちについて来なかったからです。」しかし、イエスは言われた。「やめさせてはいけません。わたしの名を唱えて力あるわざを行い、そのすぐ後に、わたしを悪く言える人はいません。わたしたちに反対しない人は、わたしたちの味方です。」

マルコ 9:41 まことに、あなたがたに言います。あなたがたがキリストに属する者だということで、あなたがたに一杯の水を飲ませてくれる人は、決して報いを失うこと

がありません。』

→ 兄弟姉妹にコップ一杯の水を飲ませるといふ小さな働きであっても、神はその信者に報奨を与えてくださる。**小さな働きを軽視してはならない。**

3. イエスは、以上のように 2 つのステップを踏んだ。第一に十二弟子たちの誤った認識を正して、子どもの信者たちもイエスの弟子であると教えた。そして第二に、ヨハネの報告を受けて、使徒としてのプライドを捨てよ、と教えた。そのうえで、いよいよ本論、子どもの信者たちをつまづかせてはならないと教える。

- (1) 子どもの信者をつまづかせてはならないという警告。これは不信者にも信者にも。

マルコ 9 : 42 また、わたしを信じるこの小さい者たちの一人をつまづかせる者は、むしろ、大きな石臼を首に結び付けられて、海に投げ込まれてしまうほうがよいのです。

マタイ 18 : 6~7 わたしを信じるこの小さな者たちの一人をつまづかせる者は、大きな石臼を首にかけられて、海の深みに沈められるほうがよいのです。つまづきを与えるこの世はわざわざです。つまづきが起こるのは避けられませんが、つまづきをもたらす者はわざわざです。

- (2) 不信者への警告。子どもの信者をつまづかせると、ゲヘナでの刑罰が重くなる。ゲヘナとは別名「火の池」、不信者が最終的に行く場所である。信者はゲヘナに行くことはないが、キリストの裁きの座で報奨を失うであろう。

マルコ 9 : 43~48

マタイ 18 : 8~9

- (3) 子どもたちを軽んじてはならない (信者でない子どもも含めて)**

マタイ 18 : 10~14 あなたがたは、この小さい者たちの一人を軽んじたりしないように気をつけなさい。あなたがたに言いますが、天にいる、彼らの御使いたちは、天におられるわたしの父の御顔をいつも見ているからです。あなたがたはどう思いますか。もしある人に羊が百匹いて、そのうちの一匹が迷い出たら、その人は九十九匹を山に残して、迷った一匹を捜しに出かけないでしょうか。まことに、あなたがたに言います。もしその羊を見つけたなら、その人は、迷わなかった九十九匹の羊以上にこの一匹を喜びます。このように、この小さい者たちの一人が滅びることは、天におられるあなたがたの父のみこころではありません。

(4) 神の裁きの前には隠れることのできるものは何もない

マルコ 9 : 49 人はみな、火によって塩気をつけられます。

→ 「火」は、神の裁きを象徴する。「塩気がつく」とは、塩はスープや食材に入ると全体にまわって塩気を免れる部分がないことから、裁きが徹底して隠れることができないことを意味する。

→ また「塩」は清めをも象徴する。裁きである「火」と清めである「塩」が両方関係するのは、キリストの裁きの座である。私たち教会の信者は、キリストの裁きの座で、火を通り、不純物がすべて焼き尽くされて清められる。

(5) 裁きを意味する「火」から離れて、塩そのものについて語るなら、塩はよいものである。塩は人間の生存に欠かせない。塩気がないと食べ物は腐るし、美味しくない。誰が一番偉いかなどの議論をしているのは、霊的に腐るし、信仰生活を喜べない、それは言うならば、塩気を失っている状態である。だから、そんな議論はやめて、互いに平和に過ごしなさい、とイエスは教えた。

マルコ 9 : 50 塩は良いものです。しかし、塩に塩気がなくなったら、あなたがたは何によってそれに味をつけるでしょうか。あなたがたは自分自身のうちに塩気を保ち、互いに平和に過ごしなさい。

「自分自身のうちに塩気を保つ」とは、辛口できびしいことでもずけずけとやることではない。食べ物であれば塩味が程よく美味しい状態、人間関係であれば互いに平和に過ごす関係である。

次回は、教会の信者たちが、互いに平和に過ごすための教えである。教会は、この教えの時点ではまだ誕生していない。教会の誕生は、翌年、イエスの十字架の死、復活、昇天を経て、昇天から 10 日目、五旬節の祭りのときである。イエスは弟子たちに教会を建て上げさせようと、今ここで、訓練し、教えているのである。